

五章

教え兒たちは稱える

秋 思

増 田 精 家

水曜日の昼にはわれわれ仲間全体が一堂に集つて会食をするということになつてゐる。「君子は衆と共に楽しむ」という意味も含んでゐるであらう。六月十三日（昭和三年）―水曜の十一時頃鈴木校長が階下の職員室（商工実習学校）に見えて、暫く国家の重大問題について話し合つたが、会食日なので校長も一緒に食事をされた。各自好きなものを食うが、校長は十五銭のざるそばである。そばといえ、先生が蔵前時代に、よく学生控所にやつて来て、若い者と一緒にかけてすすつて居られたことを思い起す。その頃はかけ一杯三銭だつたと記憶する。

やがて校長の面白い座談がはじまつた。校長は座談の達人で、私などは蔵前の頃以来、その座談によつて薰陶されたところが少くない。

新橋駅の前で大老と中老の二人が立話をしている。大老は横浜の大隠居大谷嘉兵衛翁であり、中老はわが校長である。東京のある会合に招待されての帰途であつた。

「大谷さん、あなたすぐうちにお帰りですか。」

「ええかえります。」

「もう夕方ですから一緒に飯を食いませんか。あなたのお好きなすしを食いましょう。」

駅前の穴蔵のような路地にある名物すし屋の暖簾が巷の風に揺れている。

「そりやうまいすしですから、やつてみなさい。」

「さあ……………」

大隠居は首をかたむけた。

「さあ……………今日は……………」

翁は穴蔵の暖簾と自分の姿をそつと見くらべた。

「これから、あなた、用事はないでしょう。」

「用事はありませんが……………」

「じゃ、ええでしよう。」

「さあ……………」

翁の頭の中では、フロックコートとシルクハットの堂々とした貴族的な自分の風姿が、ぐるぐると旋回しはじめた——シルクハットである汚らしい暖簾をくぐるとは……………」

大きな図体のバスやタクシーが、けたたましい警笛をならして右往左往する。都大路には潮のように人波が寄せては返し、駅頭は雑然とした音響に満ちている。

「うちに帰つて晩飯を食われるだけなら、ええじゃありませんか。」

うらめしいことなるかな。何という凄じい追及であろう。

「さあ……………今日は……………」

翁はもうほとほと閉口し切つている。

「まあそんなにいやなら仕様ない。わしだけではいりませう。その代りあなたにお土産を持つて行つてあげましょう。」

やがて、息詰るような洞窟の中から青天白日下のオープンエヤーに逃げ出して来た大隠居は、長太息やゝ久しうして、やれやれと二等車のソファに深く老軀を沈ませていた。

数時間の後、大谷大老は土産にもらつた名代すしの折詰を開いて、愛孫達と共に、笑いき

ざめきながら、得も云われぬその日本味を賞していたであろう。

この一場の喜劇を生んだすし屋の暖簾の中は、未来派の画のように不平等辺四角形の奇怪な土間で、立食いするか又は腰掛けて食うようになっていたが、何々会社の重役とか何何政務官だとか、その令夫人とか云つたような現代の名士連がその華客なので、この親爺なかなか鼻息が荒いらしい。特別調製の例えば赤貝のすしなどになると、戸棚の中にしまひこんで、名も知らぬ雑草のような人間には香もかがせない。一握のすしが十銭から二十銭で、常連になると、月に五十円の金を落すものもあるらしい。こうして日に三百円の売上げもあるそうだ。

一握の飯にそんな価値を生み出すのには、何か技術上のこ、つがなければならぬ。そのこ、つを握つて、容易に他の追随を許さないところが、名人の名人たるところであろう。もとより材料を精選しなければならぬから、酢と分量、酢を入れて飯をたく加減なども、風味と微妙な関係をもつであろうが、最も肝腎なのは、米の調合にあるということだ。これが味を制する鍵鑰である由。

(中略) 凡そ物をこしらえる時に、原料の調合が大事なことは私といえども心得ている

が、すしの優劣が米の調合にあるとは想像したこともなかった。

すしを握つて月一万円を手におさめるのは、つまり、一芸に秀でて、その奥義をきわめた人の力によるものだが、……誰の口にも賞味されるような食物を作り得たのは、その親爺がひたすらに、すしのために没頭したためであろう。(以下略)

以上はかつて商工実習の同窓会誌に書いた『雑草を拝む』という私の随想の一部であるが、私達は随時随所、泉のようにわき出る鈴木先生の名座談を、陶然として聴き惚れたものである。

座談の妙もさることながら、講演もまた実にうまいものだった。

蔵前時代に先生は応用化学科の科長であられたが、応化会というものがあり、時々先生達と学生の会合があつた。ある時の会合で私達は鈴木先生の満蒙旅行談を聴いた。外蒙古の天然ソーダ地帯への探検物語である。

シナ服を着用して、微笑をうかべながら現われたのが先生であつたのには驚いたが、日本人離れをした大陸的な、いわゆる大人の風格があり、シナ服がよく似合つていて、私はつく

づくと感じて眺めた。

話は満蒙の地図をたどりながら北満砂漠地帯へと進んで、いよいよ佳境に入り、荒漠たる原野の風景がわれわれの眼前にはうふつとして展開して来た。そして次第にいつともなく詩境へ導かれてゆくような思ひであつたが、突如として漢詩の朗誦が流れるように聞えて来た。――

「馬を走らして西来天に到らんと欲す

家を辞して両回月の円なるを見る

知らず今夜何れの処にか宿す

平砂万里人煙を絶つ」

こうして満蒙の地で耳目にふれたことが、克明な報告となり、あるいは情趣豊かな物語となり、また感想あり、識見ありで、これらを織りまぜた興味津々たる講演に一同は魅了され、話が終つても、感嘆のざわめきがしばらくは場内の空気をふるわしていた。

この感激深い名講演は私にとつての第一印象であつたが、その後横浜高工や商工実習において、あるいは横浜工業懇話会その他の機会において、幾十回となく先生の講演をきいて

は深い感銘を受けた。

先生の著書の数々をひらいてみると、かつて聴いた講演や座談で耳底に残っている先生の言葉がよみがえつて来て懐しい。そして、いつともなく印象づけられた片言隻語が、私の生涯における時折の指針として、生活の方向を指し示していたことを感ずるものである。

「君にわしの書いたものをやるから、角の有隣堂に行つてみたまい。」といわれたので、横浜高工門前の本屋に行つてみたら、何と金泥の美事な表装の大きな額を渡されたのには全く驚いた。「行雲流水 為増田賢兄 天羊」とある。思いもかけない先生の書を、立派な表装までしていただいた感謝と喜びに、早速座敷に掲げて眺め入つた。

商工実習同窓会誌（昭和二年）にのせた「行く雲流るゝ水」という感想記を見られて、書いて下さつたのではないかと思われる。行雲流水は無礙自在なる心境の象徴でもあるので、先生の共鳴を呼んだのもあろうかと思う。

他日六ッ川の丘に先生を訪問してお礼を申上げたが、「天羊」の雅号の由来をたずねたところ、

「わしは羊の年の生れじやから、まず「羊」の字を持つて来たが、上につける字に困つた。だが結局上なら「天」でよからうということで、「天羊」としたよ。」

二人は思わず笑つた。

この雅号の誕生は、淡々とした先生の風格を物語つていゝるのではなからうか。

昭和十年の七月、私は鈴木先生から岩手の工業学校長にすすめられ、奉職十五年の商工実習学校を辞して、盛岡に転ずることになつた。

先生を訪問してお別れの挨拶をのべたが、記念にといつて一幅の掛軸を下さつた。早速掛けてみると、絹地におおしい達筆で、「読万卷之書行千里之路 昭和十年夏日 贈増田賢友 煙洲老人」と書いてある。

しばらく無言で私は眺めていたが、万卷の書を読み千里の路を行くとは、常に研修を怠らぬ努力をつづけながら、遙かなる人生の路を一步々々進んで行け、という意味であろうと考え、励まして下さる先生の有難さが身にしみた。

かつての天羊は、この掛軸では煙草礼讃をあらわす「煙洲」となつてゐるが、煙草といえども、葉巻の煙の芳香がいつも先生のお伴をしていたものだ。学校の廊下などにさしかかると

紫煙の芳香がただよつている。「さては煙洲先生の来訪だな」と思いつつ職員室にはいつてみると、はたしてそこには先生を囲んでの歓談に花が咲いていたものだった。

私はこの掛軸をいただき、「岩手の土となる覚悟でやつてみます」といつて六ツ川の山荘を辞去した。

あれから二十三年の歳月は流れたが、更にさかのぼつて、明治四十四年郷里佐賀を出て来て、蔵前の赤煉瓦の校舎の中で先生にお目にかかつて以来の年月を算えてみると、大方半世紀にもなる。先生との御縁によつて今日ある自分のことを考えると、まことに人と人との縁、また人間の運命というものは不思議なものだと思ふ。

「行雲流水」の額はいつも座敷の長押の上に掲げてあり、「万卷之書」の軸物は、折にふれて床の間に掛けることにしているが、きょうもまたこれを掛けて、数々の思い出をたどりながら、米寿に達せられた先生をしのんでいる。

秋の夜や師の書を仰ぎいて眠らず

(昭和三三・九・一一)

ハイカラな古武士鈴木達治先生

大正四年・蔵前応化 菊 池 武 男

私が大正元年に蔵前の応用化学科に入学した時に鈴木先生は其の科長をしておられ講義は有機化学を担当しておられた。今でも霜ふりの詰襟の服を着て講義をしておられたお様子が眼に浮んで来る。講義で今でも印象に残っているのは、先生が外国の科学者の名前を挙げられる時に何々さんという敬称で呼ばれる事であつた。例えばアボガドロさんがこういう説を立てたという風に話をされたものだ。私は応化同志会の委員をやつたり又文芸部の委員になつて「浅草文庫」という文芸雑誌の編集をやつたり又端艇部の選手をやつたりしていたので、自然先生のお目にふれる事が多く随分あばれる奴だとお考へになつた事と今でも恐縮している。其時分先生は学生の教育に対してはかなり自由主義的なお考を持つておられた様に

思われたが、又一方にはどこか古武土的な風格を具えておられた。当時学校構内に教官食堂というものがあつて、そこを借りて年に何回か応化同志会の会合をやり、応用化学科の先生方や他科の先生方にも時には御出席を願つてお話をして頂き食事を供にしたのもであつたが、其時には洋食の食べ方や又宴会の時の服装についての注意などを外国のお話をされながら教えて頂いたり又ある時には「詩吟というものは非常に良いものだが誰れかやらんか」などと言われたり、学生の方も調子にのつて一かどの演説をやつたり詩のようなものをどなつたりしたもので、先生方と学生との間は実に和氣あいあいたるものがあつた。今のようなバーやキャバレーというものはなく又歌謡曲というものもまだ世に出て来ない時分であつたので、このような会合や学期初めにやるクラス会が当時われわれ学生の唯一の楽しみであつた。又当時学校の記念祭には応用化学科として香水を作つて売つたものだが、其の収入を応化同志会の財源にしたという要望が学生の間で起つたので、私は応化同志会の委員として科長の鈴木先生の所にお伺いしてそう願ひしたいと申しあげると、先生はじつと考えられておられたが「君達はどれ位お金がほしいのか」と問われたので「私は出来るだけ沢山ほしいのです」とお答したが其のあとになつて結局此の売店は全部学生が管理して純益の大部分

を応化同志会の基金に繰入れてもよいという事になった。其時の事を今思い出してみると小生は態度といい言葉使いといい随分生意気で失礼であつたと思われるのに、先生はわれわれの言い分をよく静に聞いて下さつたが今になつて恥ずかしい気がしてならない。こういう風に勉強以前の方に身を入れ過ぎた事もあつて実習の方は少しズべつた事もあり先生に辛い点をつけられたりした。実習で思い出す事は実習の時間に二三人で白金皿の中に赤砂糖を入れてキャラメル焼きを作つて食べた事があつたが、作つている時丁度鈴木先生が廻つて来られて「何をしているのだ」と軽く聞かれたので「今砂糖中の水分を計ろうとしてゐる処です」と言い逃れをしたが、先生は知つて知らぬ風をして其のまま行つてしまわれた事があつた。これもおそ蒔きながら白状してお詫びを申しあげておき度い。

大正四年に学校を出てから私は田舎廻りばかりやつていて鈴木先生と親しくお会いする機会もなく只お噂さによつて先生が御元氣でお活躍されておられるという事は御伺いしていたが、過る三十年の七月に卒業満四十年のお祝の集りをやろうという事が同級生の間に話が纏り其の話を先生に予め申しあげるために六ツ川のお宅に御伺いしたが、其の時お年が八十五才とお伺いして余りご元氣なのに全くびつくりした。先生はお宅の前はかなり長い而も急な

凸凹した坂道を毎日新聞かなにかを取りに上り下りされているというお話であつた。久し振りにお会いして昔北海道でビート糖を作る事を初めて提唱された時の事などお話をされお記憶の良いのに驚ろいた次第であつた。葉巻をふかしながら昔を語り今の世相を論じられるお姿は矢張りわれわれの学生時代にお見受けしたハイカラな古武士のお姿そのままであつた。卒業四十年の祝賀会は箱根宮の下の「むさしの」旅館でやつて鈴木先生の外橋本重隆先生と鈴木京平先生の御二方の御出席をお願いして一晚先生方を囲んで皆昔の学生の時の気分に戻つて食い歌い騒いだが、三先生の内橋本先生が此の夏に亡くなられた事はまことに悲しみに耐えない。あれから三年両鈴木先生には相変らずの御元気で老鈴木先生は目出度く米寿の高齡に達せられ益々御健在、只今後進のために自叙伝風の隨筆を書いておられるとの事をお伺いして心から御祝いを申しあげ度いと存じます。同時にわれわれも先生にあやかつてもつと元氣を出して働かなくてはならないと考える次第であります。(了)

吾れらの太陽

大正四年・藏前広化 吉 田 吉 次

藏前を出てから、終戦まで、殆んど満州で過した私は、先生方との交りは至極あつさりしたもので、鈴木先生との間柄も、その例外ではない。大連で一度お迎えした様な気もするが、はつきり思い出せない。

こうした疎遠にも拘らず、今度、先生の米寿祝賀の御知らせを読んでいるうちに、近頃おそわれていた私の憂鬱が、蔭も形もなく、吹飛ぶという、心機一転の現象があらわれた。どうしてだろうと、記憶を辿つて見ると、アーそうだ。と思ひ出すことがある。その思出を記して、米寿御祝いの言葉とする。

今夏の午下り、同窓の菊地氏を会社に訪ねた。丁度山口氏も顔を見せた。誰れ云うとなく、こんな会話がかわされた。

『去年は湊屋君、今年藤田君、毎年一人づつかけてゆく様だ』

『来年の番は誰カナ。〇〇氏があぶないという話もあるが……』

『現在二十人は生きてるから、あと二十年の寿命と云うところか』

『そうすると、あと二十年生きた者が、一番永生きということだネ、現在六十四、五歳たから、八十五、六歳というところか』

『マア、そんなところかも知れない。生き残りは誰カナ』

『最後の一人は、弔詞を述べて呉れる同窓が一人もいないということになるが、それも寂しいネ』……

その時は何気なく、軽くとりかわした話に過ぎないが、日のたつにつれ、妙にこびりついて離れない。元来私はのん気な性分で、父親が長生き(九十一歳で五年前他界)の關係か、死ということは、余り考えない性分であつたが、昨年末胃潰瘍の手術で、あの世の入口から戻つて来た様なもので、其後、どうかすると、暗い気持におそわれる。段々静養の甲斐があらわれて、どうやら、健康も元通りとり返した様であるし、ポツポツ、仕事にも手をつけたのでいくらか気は紛れてはいるものの、昔の様な暢気さには帰れない。こんな気の弱いことではと、はずんでは見るものの、どうすることもならぬ、昨日今日であつた。

ところが、今夜の米寿御通知を見た途端に、この憂鬱がスーと、消えて無くなつた様な気がした。ハテナ?と考へて見た。

それは余り古いことではない。二三年前、鈴木先生外二先生（鈴木京平先生と橋本先生）を迎えて、箱根でクラス会を催した時のことである。

散々飲んで、さわいだ前夜のこととは忘れたかの如く、翌朝、一同は先生をかこんで、ジュンジュンと、静かに、いつもの口調で説かれる、先生のお話に耳を傾けていた。

お話はそれからそれへと尽きない。みんな覚えてるわけではないが、かねてから先生の御持論であつた、試験無用論を主唱された当時の思出や、徳富蘇峰翁と交遊など、最近の日常生活の模様など、一同は面白く伺つていたのであるが、先生は何か思いつかれた様に、筆硯を取り寄せて、

『賢難愚又難。卒賢入愚更難』

『賢而多財則損其志。愚而多財益其過』

という。古人の言を、サラサラと書かれた。『賢を卒へて、（賢を卒業して、と念を入れ）、愚に入るは更に難し。』の句を特に力強く読まれたのを覚えてる。恐らく、これは、私共

に対する訓話ではあるが、その半面先生の寡慾でんたん（恬淡）にして、悠々自適の心境を語られたもので、先生位のお年と達人にならなければ、この真意を理解することは、至難であると思うが、その時、私は私なりに、

『ハハアー、先生の御長命もこうした御心境から生れるのだナ』

長寿の秘伝は、これ！これ！！と感じ取つたことがある。

このインスピレーションがあつたればこそ、先生のお名前と共に、ムクムクと記憶を呼び戻したと見える。これは、暗夜のともし火どころの話ではない。そうだ！！先生は吾れらの太陽であつたのだ。

伺えば、今度自叙伝風の随筆を執筆されてるようですが、この輝かしき太陽の発散する光が、そしてその温味が、吾々の胸にしみ込んで、生長の芽を育ててくれるに相違ない。

日本長寿会の会長、糸川博士の著書『百歳の壮年』に先生のお名前が見当らない。一寸寂しいが、別にPRするまでもあるまい。吾れらの太陽は、やがて百歳の壮年として、吾れらだけの独占ではなく、更に広く、そして深く、世人敬仰のまこととなるであらう。

（九月十五日記）

無 題

大正五年・蔵前応化 荒 木 東 一

二年程前に家内と六ツ川の先生のお宅にお見舞いに行つた時、家内は「あれが鈴木の達つあんですか。非常に温厚で、あの先生の下だから横浜の卒業生は、独立の精神が強く社会で重要な位置を得てる人が多いのも尤もですね。」と福沢諭吉先生と同じように尊敬をもつて帰つて来た。一見した女子でさえも、このように先生を慕つているので私も嬉しかつた。

想えば、私が昭和三年に世界早廻り競争をした時、横浜の学生を大勢連れて波止場へ激励に来られた。又、私が留学から帰つて来た時に工業経営学科（この頃になつて流行してるイ نداストリアル・エンジニアリングの事）を日本の大学には、どこでも教えていなかった。この学問を横浜で教えるようにと私を訪ねて「荒木君、工業経営についてテーラーの賃金制度は余り人を機械扱いにするから、あの点は日本に合わないから教え方を注意した方がいい

よ。」と云われた。私が横浜の講師になつたのは実に大正十三年の頃であるが、既に工業経営の必要性を感じ而も、その内容の悪い所を知つておられた。この先生の勉強ぶりと先見の明には誠に敬服する。

鈴木煙洲先生

大正六年・歳前応化 草 間 時 蕃

私は卒業以來現在に至るまで先生のお世話になり通しで、此の七月までは毎週一回位いは散歩がてら学校に來られて昔ながらの御高説を承つて居りましたが此の七、八、九月は暑さの爲め少し弱わられて心配もいたしましたが、涼しくなると共にお元氣となられ最近は午前中は庭を散歩されたり、お孫さん達を相手として過され午後は起きたり休んだりして要心を

されて居ります。

蔵前時代の印象は先ず一年の有機化学でしょう。ノリースの有機化学を教科書に用いられ初めは随分苦しみました。何しろ辞書と首引きでした。当時の本を出して見ましたら第一頁が二十字、第二頁が三十字と未だに其の跡が残つて居りました。此のお蔭で英語の参考書を読む自信が出来現在まで其のおかげを被つて居ります。

応化には応化同志会が有つて記念祭及び毎月先輩の話を夕食に洋食弁当を食べて開く会が有りましたが適当な講演者の無い時は先生にお頼みすると即座に承知して下さつて工業界のこと、経済界のこと、技術者としての心得等を興味深く飽る事なく拝聴しました。其の内でも蒙古へ天然曹達の視察をされ蒙古草原で霜の様に地面に吹き出てる天然曹達の事、旅行中の御苦労のお話等が一番印象に深く現在の満州と考え合せて四十何年間の時の流れをつくづく考えさせられます。

蔵前の狭い地所内で広場と言えば道場前の体操場とテニスコートのみの学校でしたが、其のテニスコートで其の時代の先生は丸々と肥つて居られバックに来る球を身体を上手に廻転して打つて居られた事も思い出されます。蔵前を去られて横浜国立大学工学部の前身横浜高

等工業学校を三無主義（無試験、無採点、無処罰）のモットーの本で始められ、初期はリーダーの養成、校風を正しく導き定む為めに大変な苦心をして居られました。其の一例は一期に数回教員、クラス代表との懇談会を開かれ生徒の要望不平を聞かれ、毎週全校生徒に必ず講話をされ且つ毎週一回夜に家庭を学生に開放されて学校を離れて身近に各方面にわたる談話の間に三無主義の正しき発達に全力を尽されて居られました。其の御薫陶を受けた卒業生は早くも五十才以上ともなり現在我が国の工業界の各層で皆重要な役割をなして居り且つ未だに先生を慕い申し上げ煙洲会と言う会をつくり毎月一回づつ既に二百回以上にもなると思いますが現在に到るまで御講話を拝聴いたし居ります。

先生には此の夏の御不快の山を乗り越えられた御健康を以て百までも先生の御声咳に接し得られる事を祈り先生の米寿を心よりお祝い申し上げます。

私の南洋留学

大正七年・蔵前応化 堀 江 不 器 雄

鈴木先生には蔵前入学以来二十有五年の長い間直接の御指導をいただき、横浜高工を退いた後も猶御高見を承りに何う次第であるから、書きたいことが山ほどもある。先生を慕う沢山の門下生と重複しない事柄を認めることにした。

其の頃私は蔵前応化の学生で（学生監杉田稔先生の御指図に従い）手島精一先生の中学一年になるお孫さんの家庭教師として其の邸に寄寓していた。明治維新後、英才を選抜欧米に留学させた諸藩があつて、それらの留學生は我が国欧米文化の基礎を築き其の元勳と仰がれるに至つたが、手島先生も其一人である。

先生は日本の興隆は工業の發展を基本としなければならぬとの信念で、工業技術者の養成

に専念、他の榮職は一切固辭しながら蔵前の学園を育てあげた工業教育界の元勲であつたから、校長を退いて名誉教授となつても実業教育については文部省と密接な関係で、尽力しておられた。

其の先生から大正六年六月の或日、大正九年横浜高工の開校が確定し、鈴木達治先生（当時蔵前の応用化学科科长）を校長に内定した。君の卒業後の事を話しておいたから先生の指示を受けるように申された。其の頃は第一次世界大戦による我が国工業の勃興期で、蔵前の学生は卒業の一年も前に思うままの就職先を選択できた幸福な時代であつた。

鈴木先生は有機化学と酸アルカリ肥料とを担任、其の講義振りは特色があつた。酸アルカリ肥料はノートを読み、ところどころノートを離れて註釈的説明を加えられたが、丁度筆記の出来る速度であつたし、時間が来ると今日はこれまで、とどこでも打ち切られた。有機化学はノリスのオルガニクケミストリーの原書を教科書として克明に講ぜられた。ドイツ語のような発音は今も耳に残つている。途中で蒙古の天然ソーダ探險旅行をされたので私達はその本を終るには至らなかつた。先生は学生の人格教育を重視され、其の一つとして応化同志会があつた。一年から三年までの全生徒が毎月一回放課後、教官食堂に集合し、夕食を

共にして先生或いは先輩の専門的又は専門外の有益な講話を聴き懇談した。其の会で、先生は蒙古服姿で天然ソーダの探險談をされ非常に感銘した。此の会はまた天秤室の一隅に書棚を置き参考書や修養的読物を並べ、自由な閲覧と貸出をした。書物の数は多くなかつたが、中央図書館よりも便利であつたし、書籍は一冊も紛失しなかつた。当時の藏前は試験制度で点数は厳格であつたが、先生の試験はあまり悪い答案がないようになっていたと思う。

さて卒業後の件で先生の御話を伺い、いろいろ希望も申し上げた末に、南洋（現今の東南アジア諸国を南洋と呼んでいた）特産物を調査研究することになつた。それには次の由来があつた。手島先生は明治初年以來十数回欧米に出張され、いつも大平洋横断であつたが、明治四十三年に初めて印度洋經由のフランス船でマルセイユに渡られた。其の乗船がシंगाポールとペナンで長時間碇泊して、雑多な熱帯特産物を積載した。そこで先生は特に事務長に頼んで積荷リストを見られたところ、ジャバ、スマトラ、マライ、シヤムなどから多種多様（先生が今まで聞いた事のない名が多かつた）の原産物がオランダ、ドイツ、フランスの工業原料として仕向けられていることが判明した。先生は日本は地理的に南洋に近いにも拘らずこれらの原料が遠い欧米に送られるのは惜しい。日本の工場で利用し、其の代りに日本の

製品を輸出するようにしたい。それには先ず南洋についての研究をしなければならぬ。日本の研究者は競つて悉く欧米に行く現状だが、南洋にも派遣したい。欧州諸国には南洋を研究する特別な制度でもありはせぬか調査したいと思いつかれた。いかにも工業教育の先覚者である。ロンドン着後、鈴木達治先生（独乙留学中で帰朝の上、広島高師から蔵前へ転勤の予定）を引見した折に、此話をされた。其後蔵前で加藤与五郎先生の海外留学に当り、手島先生は南洋の研究を要望されたが、実現を見ないで当時に及んでいたので、鈴木先生は手島先生の衣鉢を横浜でつがれたのであつた。

大正七年七月卒業（去る七月五日卒業満四十年祝賀会を各科連合で催した）した私は九月から蔵前職員の末席に連り、鈴木先生指導の下に其の研究室で南洋関係の文献を蒐集し、これと取り組む生活を始め、九年一月先生の横浜高工校長就任公表と共に、其の驥尾に従つた。

先生は京都の同志社で新島襄先生の薫陶を受け、広島高師で北条時敬校長、蔵前で手島校長に仕え、それぞれ特徴のある三大教育家に接せられた。その体験から、横浜学園の三無主義の教育方針を樹てられたと思う。（創立当時の事は筆者も多いであろうから割愛する）

学校の創立が一段落したころ、いよいよ工業原料の調査研究のため南洋留学という文部省に前例のない命令を受け、大正十一年三月シンガポールに渡つた。乗船鹿島丸には欧州行きの留学生が十名あまりもいた。此所は南洋第一の物資集散地で、丁度博覧会開催中であつたので約一カ月滞留して勉強した。其時、南洋の特徴は強い太陽熱と多量の雨であり、その天恵により農林特産物が豊富なことを切実に知つた。

マライ連邦の首都クアラランプール、スマトラのメダン、ジャバのバイテンゾルグ、ヒリツピンのマニラが研究の中心地であつたから、その各地を目標に日程を樹て偏ねく各地を觀察するに力めた。ニューギニアとアンボン諸島は船便が少いため旅程に繰り入れることが出来なかつたが、広く南洋各地を經巡り実状を視た（専門的な事は書けば長くなり一般の興味も薄いから省略する）。

住民は白人（日本人を含む）と土民の二階級に別れ、白人は汽車汽船ともに一等、宿は一流ホテル、土民は三等、土民宿と生活程度が決つていた。日本人には早くから密航した天草娘と、鞆一つを提げ吹矢とブン廻しを持つて土民に売薬を行商した人達があつて、前者には任期三四年で帰国する白人のハウスキーパーを数回繰り返し富を積んだ老婆もあり、後者に

は店舗を構え日本商品を商う成功者もあつたが、何れも日常生活は土語を用うる中間層であつた。華僑は多数おり、其の内には富裕者も少くないが、それらも白人に遠慮するらしく、矢張り中間層に属している。手島先生の頃から十数年もたち、第一次世界大戦で経済力を増した日本の企業家は、ゴム、ヤシ、砂糖などの農場経営に手を染めた時代で、其の事業会社の社員は政策的の必要もあつて、白人と同格に生活を営んでいたから、日本人には土民語で生活する者と、欧米語を話す者と二層あると称せられており、日本総領事は（シンガポールでもジャバでも）私に日本の体面上、白人と同格の生活をするように指図されたので、文部省留学の貧書生が上流の旅行をしたわけである。役所や研究所を訪れると白人は先ず第一にホテルはどこかと聞く、良いホテルの場合は扱いが丁重であつたから私は一流ホテルの比較的安い室を選ぶ事にしていた。スマトラのメダンは大規模農園の中心地であるが、其の地は天草娘の開拓した関係から、日本の農場経営者を最近まで彼等のクラブに入るを拒み、一流ホテルも宿泊を断り事業家は困つたと聞いた。私がメダンホテルに到着、名簿に記入して十ギルダ位の（当時一ギルダは日本の約八十銭）室を求めると、助教と書いた所を指して、あまり良い室は空いてないがこれどうかと三十ギルダのを示し、十ギルダの安

い室は君の地位に適しないし、空いてもいないと主張するので致し方もなく、滞在を縮めて旅程を変更した。学者を好遇する点もあつたと思うが植民地社会制度は妙なものと感じた。こんな状況であつたから文留の規定旅費では足りず、特別旅費を要求して先生に御迷惑もかけた。

熱帯旅行のことで元気な私も二三回病気もしたが、数年来の宿望をとげ一通りの資料を蒐め、其の内には企業を予想したものもあり、熱帯焼けて帰朝した。マニラから乗つた天丸の甲板をヒリッピンの友人と散歩すると日本人と思つて者がなかつた程であつた。

帰朝の直後、あの関東大震災火災に逢い、学校と共に資料の一切を焼失、気の抜けた思いで、蒲田で数日を過したが、鈴木先生の学校復興についての気迫に教えられて再び立ち上ることができた。

鈴木先生在職当時の思い出

大正八年・藏前広化 沼 知 福 三 郎

鈴木先生が在職されていた頃の藏前高等工業学校は、手島先生の経綸により優秀な教授陣が揃い、学生もまた素質の良いのばかりが集つておつた。従つて大学に劣らぬ専門的教育を授けられておつたように思う。しかし、何しろ基礎科目も専門科目も併せて三年間にこれらを十分に学習させるのであるから、学課程は相当盛沢山であつたと考へる。その中にあつて我々は結構遊びもし運動もし、学生生活を楽しんでるように思われる。しかし上記のような学習課程の荷重から社会や文学に関する教養といつたものについては、学校の講義の中にも比較的少く、またわれわれが自分で読書により或は友人間の雑談等によりゆつくり思いをめぐらす時間は十分とは言えなかつたように思う。

この間において鈴木先生は、講義の時間中に折にふれて諸々のお話をされた。先生の広い視野と優れた識見から悠々とまた諄々とお話を始めれば清風一陣、我々の胸は開かれ、意気

は上り、視界は広くなるような感じを受けたものである。即ち先生のお話により、言わば人文科学乃至は社会科学の素養を植え付けられたわけである。

次に先生は、我々に対しドイツ語の特別講義をして下さった。オットーのドイツ文法を教科書にして、学内外ともに大変御多忙であつたのにかかわらず寸暇を割いて講義をされたわけであつた。これを思い出す毎に感謝の外はない。この講義は先生も内心厭ではなかつたように見受けられた。我々も熱心であつたし、師弟ともに心よい講義の場であつた。その例証としてこの講義中にも先生は余談に及ばれ、先生が第二回目の外遊の時の御話になり、シベリヤ鉄道によりベルリンに到着するまでの旅の間に以前に身につけられたドイツ語の会話の力をすっかり回復されてしまつたお話などを御自慢らしく話をされた。我々はそれが我々の自慢話を代弁されているような誇らしい気持で聞き入つたものである。

私のドイツ在留の二カ年は既に二十数年以前になるが、時にふれてドイツ語で会話をする必要もあるが、その際は前記の先生の御話を思い出す。また私は論文をドイツの学術雑誌に発表しているが、私のドイツ語のそもそもの芽ばえの頃には先生の講義によつて培養された事を考えないわけにはいかない。

先生は歳前時代において、病氣もされたようであるし、また非常に肥つておられた。即ち四十台終りの先生は余り御丈夫とは言えなかつたように見受けられた。その先生が米寿の齡を享けるに到つたことは、先生の御生活自体に何かしら大きな教訓が含まれているように思われる。

以上雜感を述べて先生の米寿を心からお祝い申し上げ、益々御元氣に長命を保たれる様祈る次第である。

あ　の　頃

大正九年・歳前応化　平　瀬　一　夫

大へんケンシカランこととは思ふが鈴木達治先生が今もつて此の世に御健在などとは考えら

れなかつただけに、むやみと嬉しくなる。

そこで、どうしてこんな事実が実現されたのだろうか、と考えると思当るのは僕等の一級上の連中の卒業の前祝の会合の席で沼田さんが「三年間ズベツてばかり居たせいもあるが得るところは曰く酸とアルカリ。たつたこれだけ……」と、述懐すると、先生が立つて『そんなにズべらせておいたのは我輩の方針である……』とやられて満場の拍手がわいたことである。人も我も役にも立たたぬお体裁には構いつけられなかつたのが先生の不老長寿の妙薬となつたかも知らぬ。そう云えば先生がツメえりの洋服を着てヒョコヒョコと歩いていられたことも思い出される。

今にして思えば横浜高工設立か何かでお忙しかつたのであろうが、よく休講のある先生で我々はシケンの範圍が少くて助かつたこともよい思い出の方である。

文法だ発音だと入学試験並みの英語を後生大事にヒョヒョとしている学生を前にしてノリスの有機化学を横綱がフンドシかつぎをあしらう様に片付けて行かれる講義ぶりが面白かつた。『オルガニツク ソブスタンス』と読んで行かれるのが今もつて耳にこびりついている。おかげで大層なものに考えていた原書なるものに深い親しみを持たせて戴いたことは今

日になつても変らぬ感謝をささげる。

酸アルカリの朗読講義というのがあつたのには一寸参つたがその速度と内容には文句がなく、当時真々田君という飛切上等の秀才がいたがこいつが曰く「何を講義しても一番良い先生だなア」と、秀才の中の秀才がいうんだから「そうだろうなア」と思つたことである。

前を通つた一学生に過ぎないのですが

大正九年・歳前応化 鈴木 恪 雄

鈴木達治先生にはこの九月米寿の高齢に達せられた事を承りました。先生のような偉大な指導者が十分に御活躍の「時」に恵まれた事は寔に祝福さるべきことと存じます。

私は特別に先生に関係深いものではありません。ただ一学生として先生の前を通過したに

過ぎませんが、先生の影響はここにありと云うことは出来ないで、ふんわりと全身を包んでいる感じです。

先生に初めてお目にかかったのは入学試験の面接の時でした。中学校の五年はその準備に仲々忙しく、学科ばかりをやつていて面接の際どうすべきか何も知らず考えても居りませんでした。呼ばれて面接室に入ると先生方が並んで正面に鈴木先生が居られました。あなたのお父さんは何を教えていますかときかれ、直立したまま地理科ですとお答えしました。もうよろしいとのことに退出したが実に簡単なものでありました。

それから卒業後塩水港製糖会社の入社試験に東京の同社出張所に行った。「社長さんです」という言葉に正面に見えた慎哲氏に目礼した。(その時はまだ御名前もお顔も知らなかつた。鈴木先生の場合も同様であつた)何もきかれないで「採用します」という声が私の鼓膜にひびいた。実にあつけないようなテスト風景であつた。

人生にとつて大切な入学と就職が何れも一度でスラツときまつてしまつた事は幸福だと思つている。このような事はそれからの人生にどんなによい力づけになつているか計り知れないような気がする。この点からも鈴木先生には感謝の気持がわいてくる。講義の時のダブル

ボンドという発音は多くの方が懐しく憶い出されることでしょう。蒙古の天然ソーダを視察されたとかの時に支那服を着られた先生を御見かけした時——その他等々、先生の抱擁力と自然に学生を感化される御人徳。

ああ、人生の重大なスタートに鈴木先生のような立派な方に指導して頂いた幸福を感謝すると共に、先生の上に神の加護の益々厚からんことを祈念するものであります。

鈴木達治先生の蔵前時代

大正十年・蔵前白羊会員 源 生 鉦 太 郎

鈴木達治先生が本年九月十一日を以て、米寿の賀を迎えられると聞いて、其の御健康と逞ましい生活力とに心からなる喜びを申上げたい。殊に永年の間、人生行路の指針たるべき随

筆をものせられて、後進者のために教訓を垂れんとする御心情に対しては、寔に頭の下がる思いがするのである。門下生の有志が挙つて先生の隨筆集を刊行せんとする企画には、双手をあげて賛意を表するのみならず、何か拙文を献じたい気持ちに馳られ、茲に蔵前時代の思出草の一こまを誌して、先生の御高德を偲ぶすがといたしたいと思ふ訳である。

○

話は私共が蔵前に入学した当時のことに溯る。大正六年四月相当の競争率で蔵前に入学出来た私共は、喜んで毎日毎日を通学したものであつた。仲でも最も嬉しかつたのは、鈴木校長先生受持の講座が有機化学であり、其の教材としてジエームス・エフ・ノリス著の原書を使用せられた事であつた。初めて接した原書、然も先生の教室における講義振りは今でも目頭に浮んで来る。英語は左程流暢ではなかつたと記憶するが、一語一語先生の口から発せられた声には、一種の特徴があつて、先生の人格から発露する温顔と共に、何とも言われぬ親しみが私共の脳裡に深く刻み込まれたようである。

毎日ノリスの原書を小脇に挟み乍ら電車通学する誇らしい気持と、先生が諄々と説かれる講義振りとは、全く劍禪一致の境地とでも言うことが出来ようか。私共の通学が如何に楽し

かつたか、先生の講義を受けることが、喜び其の物であつたかを想起するのである。

○

有機化学が今日時代の脚光を浴び、技術革新の波に乗つて本邦産業界のあらゆる分野に於て、重要な役割をはたして居る現状は、産業人として心強いばかりでなく、先生の御訓育が如何に大きな影響力を持つて居たかを痛感せずには居られない。先生の御教導に心からなる感謝の誠を捧げたいと思う。

(昭33年10月4日)

母校の有難さ

大正十二年・横浜電化 広部 俊十郎

私は、電気工学を学ぼうと志して、蔵前高工を受験したかったのだが、何しろ私の不得意な漢文というやつがあるので、断念して当時（大正九年）新設された横浜高工の電気化学科へ入学したのである。実をいえば、「電気」の二字に引かれて電化へ入ったのだが、化学が主だとはつゆ知らなかつたのである。今から思へば滑稽なほど無知だった。

在学中、煙洲先生の「名教自然」の自由教育にすっかり心酔、卒業後は同窓の人々を語つて、煙洲先生を囲む座談会を企画して、毎月一度ずつ会をもち、現在にまで到っている。この会名を煙洲会というが、これは私が名付けたものである。この煙洲会は結束が固いといわれている横浜出の数ある集りの中で、それらの中心となつてゐるものだろう。

卒業後、長らく東芝におり、戦後二六年に株式会社広部商店を創立して、今日その経営に

努力を続けているが、東芝時代のよき先輩や同僚達、また同窓の人々に助けられて、曲りなりにも仕事が続けられて行く事ができている。実際に仕事をしていると、名教自然に育くまれた母校出の人々の結束力の強さに、いつもバックアップされてうまく行つてののだと思える点が多いし、また自社の内部においては、その結束力を軸とした和の精神というものが体得せられ万事もまく行つてるように思われる。そしていつも母校の有難さをしみじみと感じさせられるのである。

そこはかとなく

大正十五年・横浜応化 山口 辰 男

私共の学生時代（震災前後）からみると、弘明寺界限はずい分と変つたものである。学校の看板も高工から大学工学部と変り、バラック校舎も堂々たる鉄筋コンクリに変り、か

つては市民の通行御自由を標榜した無扉の校門にも嚴重な重い扉が設けられ、そして学生たちの物の考え方も變つてきて、昔を偲ぶ何物もみられなくなつてゐる。

しかし、玄関の正面にそそり立つてゐる大理石のミナレット、「名教自然」碑をみいだすと、古い卒業生はホツとして「我が家」へ歸つた感懐にひたれるのである。地上の物件が變つても、学園の伝統の「お題目」が儼存してゐるのを見れば、そこに母校を感じ、心の故郷を見出し、「抱かれ」を感じるのである。かつて私たちは、そこで「自由啓発による教育」を三無主義の旗幟の下にうけたのを思い出すのである。

×

事実、入学したての私共、生意気のハイティーンには、確定した定義の示されていない「自由教育」なるものの本質を理解するにはいささか脳が弱かつたようだつた。ただ、中学時代の「万事べからず」的抑圧からの解放と、その反動とが三無主義をこよなきものとして方法論的に「渡りに舟」とばかりに受容したに過ぎなかつた。いつしか三年がたつて、おぼろげながら思想的にやや理解しかかつた頃には、失業的卒業が近づいてきていたという次第だつた。

いわゆる社会なるものに出て、「働く自分」をみつめるようになった時、漸く理解できたといえるかもしれない。しかも、それとて、自分流の理解であつて、果して煙洲先生の考えいられた事と一致していたかどうかは、今になつても怪しいものである。自由教育といい、三無主義といい、方法論的には比較的容易に把握できても、本質的には極めて難かしいものといえる。それを私たちが、御都合主義的に採上げてきた事については、今にして、五十路の齡を越した頃になつて慙愧にたえないと思うのである。

×

三無主義を「自分の都合のよいように」理解した私は、「よく遊び、そしてよく遊び」を続けて、三年を経たら人なみに卒業証書なるものを頂いたのである。それには確かに、「応用化学科の課程を卒業」となつていたのであるが、その実は、音楽部・ボート部・新聞部卒業というのがホントかも知れない。

「高工教育は確かに職業教育である。しかしそれは教育の一手段であつて、眞の教育は自由教育でなければならぬ」と喝破された煙洲先生の御言葉を私はとつこにして「技術の学校で技術を習つたのは一手段であつて、それよりも『自由啓発による勉学をやる』ことが眞の

勉強であること』を知れば、たとえ技術の覚え方が足りなくても悔ゆるところなし」と解釈したのである。技術の学校を出たからといって、それにこだわることはない。自分の天分をみつけ、それに応じて自己を啓発して行けばよい。と理解したのである。こう考えたのは私ばかりではなかつたようだ。

尤もこう考えられるような時世でもあつたのだ。学校の卒業生を引受けるだけの働き口が無かつたような産業界の未発展時代で、しかも不景気時代だつたせいもある。

私達はそれぞれ本道以外の色々の仕事へと散らばつていつた。政治家のカバン持ちを志願した比嘉樽吉というサムライもいたし、海を越えてメキシコくんだりへ出かけていつたサムライもいた。ミルクスタンドのレジ係へ就職したのもあつた。私なども、学校で学んだ事で直接めしの種になつたというのはホンの数年だけだつた。これは化学でめしが食えるほど化学の勉強をしてなかつたからというのがホントかも知れない。今日化学から離れた経営学といったものと取組んでいるが、私はその中に私なりの天分を見出して、最適の仕事だと思つており、他人は可笑しいと思うらしいが私は当然の事と思つてるのである。むしろ高工で技術的なもの科学的なものを嚙つたことが今になつて大きく役立っているのを有難くさえ感じ

ている位である。私の今日あるのは自由教育のお蔭だと考えているのであつて、もし私が、高商か他の商学部へ行つたとしたなら、今のような「打込める仕事」にめぐり合わなかつたであらう。

私は今、自分の扱つてゐる学生に対しては、学校の規則の許せる範囲内において自由教育を試みている。そして自由教育というものは大へんに努力と寛容と忍耐を要するものであることを身にしみて経験しつゝある。そして煙洲先生の偉大さに頭を下げずにはいられない思いを日夜持ちつづけてゐるのである。

×

私はどういふものか子供の時から「ものを書く」ことが好きな性分だつた。これが今に続き、「芸が身を助ける」程度に役立っている。幸いに「芸が身を助ける程の不仕合せ」にはまだならないが、技術屋仲間の間に伍していると「書くこと」に縁のあることは何でも持ち込まれる位の不仕合せにはぶつかる。忙しい忙しい、暇がない暇がないといふ乍ら工業会の新聞編集を引受けたりして、「馬鹿な事を書くな」と叱言をいわれたりしている。

今度もまた、この煙洲残筆の編集を引受けてしまつて、忙しがつてゐる。この前に先生の

隨筆集「煙洲漫筆」も引受けたのでこれで二度目である。殆どの人は、何れも、これらの隨筆を一ぺんは必ずよまれ、中には二、三度よまれる人もいるだろう。しかるに私は、原稿が手許に着いてから、本になる迄に最低七へんは読むのである。

原稿のままで一ぺん、編集する時に一ぺん。初校、再校、三校と各一ぺんずつ、出来上つてミス探索のためにもう一ぺん、どうしても七へんは読まなければならぬ。大抵の場合だと、三べん目にはイヤになる。本が出来上つた時などにはバラバラとやるのもイヤになるものである。

ところが煙洲先生のものになると、その何べんが奇妙にイヤにならないのだから不思議である。先生の今までの隨筆は全部見ていて、その内容も諳んじる位に知つている。原稿を頂く前に、これとあれ、あれとこれは書いてあるなとまあ八割程度はわかつている位である。それにもかかわらず、いつも楽しくスラスラと読んでしまうのである。それは先生の文章が流麗だから魅せられるのだなどとはお世辞にもいえない。名文だからどうのといふのではないのである。

先生の文章は読むというもんじゃなくて、聞いてるといふ調子のものである。

先生の話術は一種独特のものであつて、吶弁の雄弁なのである。高座の名人たちのもつあの「魅惑」があるのである。聞かせる、それも無理にきかせるのではなく、いつとはなしに聞き入つてしまつているのである。この先生の演説そのままが文章になつているのである。だから何時とはなしに読み入つているのである。先生の文章は実はおはなしなのである。そこに先生の随筆の素晴らしさがあると私は近頃になつてわかり出した。

この「残筆」を御引受けした前後は、私は公私の仕事が山程も積つていた頃だったが、そして忙がしい合間合間にやつてきた仕事だったが、それが一向に苦勞にならないのだから不思議である。

実のところ、もう一ぺん、こんな機会に恵まれたいとも思つている位である。

聖書は不朽の名著だといわれる。先生の随筆は「自由教育の聖書」だと私は思つている。

煙洲先生と草創期の建築科

昭和四年・横浜建築科 網 戸 武 夫

大正十四年に私は横浜高商と高工に同時に入試にパスしたが、結局高工の電気化学科に進学した。所が翌十五年に建築学科が創設されるのを知つて、二学期で退学届を出して改めて希望の建築学科に再入学したのである。

建築学科が横浜に創設されるまでの経過については沢山のエピソードがある。

当時、我国の建築界の長老であつた現社会党の曾禰益氏の父君達蔵博士および故宮本百合子さんの父君中条精一郎氏の両氏に、当時の校長煙洲先生が再三に亘つて相談され、フランスの美術大学を卒業されDPLGの称号を得て帰朝された中村順平先生を科長に推されて創立されたものである。任命されるまでの手続とかその他文部当局との折衝など、従来の慣習にこだわらず、煙洲先生は自由闊達な、貫かねば止まない熱意で、各方面を動かされて、中村順平先生の建築学科を実現されたのである。

この建築学科が当時の我が国の建築界の風潮に抗つて孤高の学風を堅持するには、煙洲先生あつてはじめて可能であり、中村順平先生もまた煙洲先生なくしては一日として教育の場を日本国土の上に恐らく持ち得られなかつたに相違ない。我国建築界の動乱の中に生れ、その中で生育したわれわれ初期の学生は、維新前夜の中に生きる異状な渦巻を身をもつて体験してきたのである。

中村先生の教育はまことにきびしく、一本の描く線にも容赦する処はない。天才教育というか、息のきれたものは三年というマラソン競争から落伍するより仕方がなかつた。

一年から三年までは製図教室を一つにして、上級生と下級生とは故参と新参との区別を日常の修練の上でも訓然と強いられ、然かも実力に依つて甲乙を明確にするという合理性に裏付けされた徹底的な優才教育であつた。教室は昼夜の別なく開放され、寒中といえども夜を徹してストーブが燃やされて思う存分に教育の機会が与えられた。文部省直轄という専門学校としては到底思いも及ばない自由さを満喫できたのである。これは煙洲先生の名教自然という教育に対する信念と、熱情あふれる中村順平先生の火の出る様な教育とによらねば許されるものではなかつたと思う。その意味でも我々はまことに幸福であつたのだ。

この様にして技術の修練に終始しながらも、学生が先生の教育の間に体得したものは技術ではなかつた。芸道の修練即ち人間性の鍛錬を強く強くたたきこまれた。いいかえれば自我の確立ということを徹底的に教えられたのである。この自我は民族の自覚と強く結びついて誇りにまで強調され、格調の高い批評精神に点火し、若い学生の血を燃やし、たぎらせた。

中村先生の横浜の建築学科に残された歴史の一時期は、度はずれた狂い咲きの様に、今となつては昔の語り草とならうとしているが、何時か忘れられない中に日本の教育特に建築教育の歴史の上に記録として残して置かねばならないものだと思う。

鈴木先生への傾斜

昭和七年・造船一期 吉岡 勲

造船工学科というのは、先生の横浜高工での五人息子の末子として昭和四年三月の生れで

す。あるいは、半ば里子のようなものと言えるのかも知れません。というわけは、在学中いく度か先生からいきさつをおきまされたことですが、今ではこういうことをきく機会も少ないと思いますので披露しておきましょう。

昭和四年三月に大阪高工が工業大学に昇格するについて、文部省は造船科を神戸高工に新設しようとしたのですが、当時は経済不況に入つた頃で卒業生の就職が困難であつたため、神戸ではこれを断り引受け手がなくなりました。それでは専門学校に造船科がなくなつてしまふのでまことに惜しい。それに造船工業のような大量生産方式のりにくいものは、輸出工業として日本の国情に合つている。幸いに横浜は当時日本第一の貿易港であつたので立地条件もすこぶるよいから、こちらでひき受けようと先生が申し出られたものだつたようです。これには一つの条件がついていて、将来造船科を増設せねばならぬような情勢になつても横浜を増員することにして、他の学校には設けないという約束が文部省との間にできていたということでした。以来三十年先生の先見はみごとに當つて、造船工業は今や外貨獲得では断然他を引きはなして首位に立つようにさえなり、我々の造船工学科の卒業生は既に九百人を数え、その大部分が業界の中核となつて全国各地で働いて居ります。しかし、文部省は

あの約束を守らないで、その後三校に増設しました。その上、最近になつて、造船技術者の需要の如何にかかわらず増員しろというような、理不尽な注文をつけて来ました。

造船工学科は先生の末っ子であつたので、格別の配慮を受けて、多少甘やかされてわがままをあまりとがめられないまま育つたのではないかと、思うことがあります。甚だ申しわけない次第ですが、そんなわけで小生のような至らぬ者も出たのでしょう。私は昭和七年に卒業したので、校長としての鈴木先生には晩年に近い頃の弟子の一人です。無試験という検定制度的おかげで入学できた上に、三無主義を満喫とは言えないまでも半喫ぐらひはして学校を出たのに、先生の理想主義の教育方針をその後も可なりの間理解しませんでした。今でもほんとに理解していないかも知れません。けれど先生の教育は高度に人格的なものであつたので、ほんとの意味では誰でもがついて行けるたちのものではないと思ひますが、まして遠くから望んでいるだけでは体得できないものだつたでしょう。先生は週の中の定つた一夜を生徒の往訪のため、いつも必ずあけておかれたもので、大勢が度々押しかけて行つたようですが、私は学校での度々の講演は欠かさずきましたけれど、お宅へお訪ねしたのは在学中に一度くらいはあつたかしらんというほどの記憶しかありません。このように

あまり先生に近づくとうとしなかつたことなどもあつて理解がおくれたこともあつたでしょう。そればかりでなく万事に勾配ののろいのが私の生得ですが、その後も特にお話を拝聴する機会を度々持ったわけではありませんのに、いつとはなしに何となく解つたような氣持になつて来ています。先生の放射能に当てられたようです。そして、先生への私の心の中の尊敬の念と親しみを深くして来まして、時に御迷惑をおかけしたこともあります。

煙洲先生の一片鱗

昭和八年・造船二期 川 口 五 郎

小生の級は卒業後、本年で廿五周年に成る。結婚で云えば銀婚式である。自分の級を賞めては可笑しいが、戦後三回級会を開いて、三回とも病氣と特別用件の二三名を除いては、何とかやり繰つて遠くは北海道・四国又は中国の果てより馳せ参じて来る。本年は廿五周年と

て岐阜で鵜飼をやつたが、出席率は在学中の講義の出席率より良いと笑い合つたものだ。此の我々が夫々異つた中学校の制服を着て、初めてバラック建ての講堂で顔を合わせたのは、昭和五年四月八日の事だつた。

其の時全新入生に挨拶された鈴木校長が、そもそも小生が生まれて初めて見、且つ聞いた煙洲先生の姿と声である。

其の時の先生はビヤ樽が歩いて居る様に肥つて居られた。そして声は、アヒルが最も落着いた美声で話している様な音質であつた。

其の日の先生の訓辭は、入学の喜びの言葉に次いで、

「私はクリスチャンではないが、聖書の中に斯う云う事が書いてある。或る罪を犯した女を群集が、キリストの所に連れて来て『モーゼの律法に従うと石で投げ打て。』と云うが貴方は何うするか?』とキリストに訊ねた時、キリストは初め指で地に何か書いて居たが、彼等が問い続けるので、彼は身を起して、『汝等の中、罪無き者先ず石を投げ打て』と答へたら、群集は自らを省みて一人去り二人去り皆いなくなつて了つた。キリストは其の女に向かい『我も汝を罪せじ。この後再び罪を犯すな』と云つて立ち去つたと云うが、私も諸君に何

の罪も与えないであらう。それは私に諸君を罪するだけの人格がないからだ。だからと云つて悪い事をせよというのではない。」

小生は此の話に感じ、廿八年経つた今日尚、他の講義を忘れても此の話は脳裡を去らないのである。

又此の様な話がある。それは確か其の年の二学期の事だつたと思う。全生徒を講堂に集め「小生はクリスチャンではないが、或る羊飼が百匹の羊を連れて野原を歩いて居た時、一匹の羊が道に迷つて了つたとて、九十九匹の羊を野に置いて迷つた一匹の羊を探し求めて連れ帰つたという。私は今此所に迷つた一匹の羊を連れて帰らなければならない。実は一年生の一人が赤の疑いで警察に連行された。私はこれから、警察に行つて三年間の借用証を入れて連れて帰るから、諸君は彼を温い気持で迎えて欲しい」と涙を流して語られた。其の連れ帰られた迷つた羊は、三年後には非常に良い成績で卒業、警察より借用証も返され、立派な社会人になつたと聞いた。あの時若し煙洲先生が他の学校の様に赤だといつて退校を命じたら、彼の人生は何う成つた事であらう。斯うして生徒を決してお叱りにならなかつた先生が唯一度「バカヤロウ」と大声一喝された事がある。（此の話は市大の山口辰男先生が工業会

の会報NO9に「バカヤロウ綺談」として書いて下さった)

それは小生達の卒業式の夜の事、級で離別会を行つた後、今此処で西に東に別れたら再び此の世では会えない人も出て来るであろうという一級友の言葉に感銘した十二・三名が居残り、此の儘別れ度くない。せめて今夜は一緒に名残りの横浜を練り歩こうと、先ず訪れたのが本牧だった。

ところが卒業を祝つてくれるどころか、卒業証を見せても、制服の学生さんはお断りと冷いあしらい。こんな処は面白くない。元町へ行こうと行先を告げて出たのが運の尽き。コンクリート製の塵芥箱を二三人が次々と倒し乍ら、氣勢を挙げて自動車に分乗、元町の交番の前で車を乗り捨てた。良い気持で一列に肩を組み、「希望の光り、うららかに……」と歌い始めた所を、電話連絡で待ち受けて居たお巡りさんに、「もしもし」とやられたもの。それも事情を聞いたお巡りさんが、「卒業の夜は嬉しいものだ。それ位の事なら謝つてやるから」と加賀町署迄連れて行かれ、其所の保護室に入れられた。然し当直部長の時間潰しの一人宛の長い取調べの後、これから皆を帰すが、警察としてはこんなに遅く学生を帰す訳には行かぬから、明朝早く帰れと言われ、変つた所で卒業第一夜を迎えた。翌朝になると、署長が自

分が出る迄待つて居てくれとの事だからと散々待たされた挙句、再び代表者が呼び出され、署長自らの取調べがあり、判決が下された。「交通妨害罪に依り勾留廿八日に処す。だが学生の事故半分の十四日に負けてやる」と今度は留置室に入れられてガチャリと錠を掛けられた。一同茫然たるは当然乍ら、明日出立せねば就職試験に間に合わぬと青くなつて居る者も居た。それからの一時間は実に一日位に感じられた。其の日の夕方又一同引出されて見ると、何と其所に煙洲先生が居られた。先生は一同を睨み据えて、傍の署長が吃驚する程の大きな声で「バカヤロウ!!」と一喝された。そして今度は声を落して、「今、署長が怒つてくれと言われたので怒つたんだ。被害を調べて貰つたが、塵芥箱は全部元の儘に起されて居て被害なしとの事なので出して貰う事にした。もつと早く来る心算だつたが、商工実習の卒業式があつたので遅くなつて済まなかつた。」と云われたのである。一同は心から先生に頭を下げた。そして先生の偉大な人格に沁々触れ得た喜びを、其の夜のやり直し離別会で語り合つたのであつた。

自由啓発の影響

昭和十年・横浜応化 鈴木 木 洋 二

私がここに入学したのが昭和七年の不景気な年で就職も思うにまかせず卒業生の勤務している会社をたずねておがみたおして頼み込んだもので、それでも全員就職と云うことはなか／＼のむづかしい頃であった。従つて入学試験も一・七倍という程度でそれに無試験だったから一日で口頭試問と体格検査を終えてあとは合格発表を待つだけであつた。午前中に口頭試問で応用化学の先生方がずらりとならんだなかに一人引き出されてあれこれ聞かれたのは田舎から出て来たばかりの自分にとつてはまったく冷汗ものだった。何を聞かれたのか、どう答えたのかすっかり忘れてしまつたが、冷汗を流しただけは忘れないでいる。午後の体格検査の時はいさゝか気分もほぐれた来たが、一番終りに陸軍中佐の井上教官がいて、君は朝飯を食つて来なかつたそうだがそんなことでは駄目だぞ。とするどい目を輝かせて一言注意されたのも冷汗物で何と答えたか忘れたがこの一言だけは今尚忘れられない印象をうえつ

けられた。競争率もわずかであり、校長を伯父にもつ私にとつては無理な点は多かつたにちがいないが幸にして入学できた。在学中の思い出は沢山あるが特に煙洲先生に直接関係が少ないので省略するが、社会に出て役立つた一つは水曜日は半日で午後は自由時間だつた。一週間水、土の二日の半日になるわけである。応用化学では水曜の半日を利用して工場見学を行つていたのでこの見学丈は欠さず参加し、在学中に見学した工場丈で一〇〇以上を数えたことは色々は意味で役に立つた。その中でも思い出されるのは浅草の日本ビールを見学してそれから松竹を見学した。ビール会社でビールをご馳走になり、ほろ酔気分で松竹劇場に行つた。どうして松竹を選んだかは知らなかつたがその時はじめてエノケンの劇を見た。エノケンを知つたのはその時だつた。今考えるとエノケンのうりだした当時であつたのだろう。以来エノケンの映画はよく見に行くようになったのもそれからである。

又毎年クラス対抗の駅伝競争があつた。学校から高島町交叉点の往復で、それを六人で走るわけであるが選手をつのつたが五人しか集らない。締切り間際であるので、五人しかいないなら五人で走らう。最初の選手は最初と最後に走ればなんとかなるだらうと言うことだつた。こうなつてはクラスを代表する選手に二回も走らすことは気の毒だ。二回も走るなら私

が代つて走らうと自信のない自分が義侠心を起して選手を申し出た。選手の割振で高島町から羽衣橋まで走る事になった。応援団は自動車を一台借りて応援してくれるが、自分がバトンをタッチしたのは三番目だった。応援団の自動車ともう一人一緒につきそつて走つてくれた。生れてはじめて応援されて走るのであるから気ばかりあせるが思う様に走れない。もともと早い方でないのだから仕方がないが、一緒に走つてくれる応援者の方が早いにはいさゝかがつかりした。「早く走れ」「遅いぞ」大いに激励されてもなんとも仕方が無い。やつとの思いで三番でバトンを次に渡すことが出来たのにはほつとした。それにしても選手より応援者の方が早いのにはいささかがつかりした。まつたく落語の様な話である。まだあつた。柔道のクラスマツチに選手が足りないの。これ又義侠心から出場し主将になつて三年生の主将と試合をして、痛せた自分が箒の様にふりまわされたのには驚いた。まつたく喜劇映画にでも出て来る様なものであつた。

在学中も校長の家から通学したので、煙洲先生の影響は特に大きいものがあつた。今日も尚その考え方が残つているし大いに気を大きくして仕事をするのできるのも高工を出たお陰である。学校では修身の時間があり、一年の一学期と三年の二三学期は特に校長が担当

していた。修身と言つても現在問題とされている様なものでなく、所謂社会学と言つたもので、三年生の時は特に社会に出てからの社会学についての話で、時には講談本を持つて来て講談の話をするが最後の五分間は社会で結論づけられた。話し方の妙味を会得したのもこの時であつた。特に大きく自分に勇気づけたことは、自由啓発をモットーとしてた高工を卒業すれば決して大学卒業生におとることはない。頭の無い者は大学に行くのもよいが、何も大学に行く必要はない。社会に出て大学卒業生と仕事をして何らひけめを感じず仕事をしなさい。優秀な諸君は決して大学卒業生にまけない丈の自信をもつて仕事をする様に、と言つて大学に行くことを薦めなかつた。私も大学に行くことを止めにした。勿論大学に入学出来る自信もなかつたので、自己満足だつたことも本心であつた。然し、なぜ大学に行く事を薦めないのか疑問であつたのでそのわけを聞いてみた。その答はいやしくも自分が校長で教育している以上は、それ丈の自信をもつて教育すべきである。この一言は今尚私の心の底に残り、何事をするにしても決して他の人と競争してもまけない自信で仕事をしている。今市役所で経営指導の仕事をしているが、決して他県で行つている同じ仕事についてもまけない丈の自信をもつて行ふことの出来るのも、学校当時受けた影響によるものである。

学校の三無主義・自由啓発の環境によつて自分の志した方面に全力をそゝぐことが出来ればどんな事も出来ない事は無い。応用化学を出たからと言つて、応用化学にとらわれることはない。それを基礎に努力すれば決して他の人に比しておとることはない。高工を卒業して画家になつた人、弁護士になつた人、商人になつた人もいるが、夫々成功しているのもこの学校の特色である。その時の環境に応じて努力さえすれば、専門家になれるし、これこそこの学校の特色である。よく話をされた。私が学校を卒業して会社に勤め、後学校に帰えつて一時教鞭を執つたがその后市役所に入つて応用化学とはおよそ縁もゆかりも無い経営合理化の仕事をする事になつたが、専門の化学をすてゝ企業経営の仕事に転換する決心のついたのも専門の仕事丈が一生の仕事ではない。何をしても一人前にはなれる。その時に与えられた環境にそつて仕事をすれば出来るものだ。それこそ名教自然の教育によるものだ。何の不安もなく決心したのも、学生時代の教えによるものであり、化学をすてたことを誇りとまで感じている。現在、企業経営の問題について貸借対照表、損益計算書等の財務諸表の問題についてなんとか努力してわからないまでも何とかやりとげているのも学生時代の教育された気構えによるものであつて、学校で教つた専門をすてゝ専門外の企業経営を専門に今后も

大きな意欲をもつて続けてゆきたいし、且つ続けて行くことの出来るのも学校時代にうけた自信と勇氣が心のどこかでむちうつているからである。

最近の父を語る

昭和二八年・横浜化工・大学一期 鈴木 木 博 人

父は昭和十年横浜高工校長をやめてから一切の公職に就かず、家で悠々自適の生活を送っていた。然し支那事変から大東亜戦争へと戦渦が拡大し、時局の解決もつかず泥沼に入つた様相を呈するに至つて、父は有志を集めて必勝懇談会を作り、其の会長となつた。

この会は父が本文で述べている如く尾上町の若尾ビルに事務所を持ち、ここを本拠として県内を日夜講演して戦争への自覚を促すべく奔走した。当時父は七十の歳にたつしていたがこの講演は戦時中百回にも及んだ。

昭和二十年五月横浜大空襲後交通機関が正常でない時は六ツ川の家から尾上町の事務所迄何回となく敵機来襲中でも焼あとの中を歩いて往復した事もあつた。

父は自由主義者であり自らの規律に厳しい人間であつたので、戦前戦後を通じて物質の乏しい時も一際やみ行為をやらす配給のみで過した。

ある時封書にはるのりもなく父は学校迄行つて学校ののりを使用させてもらつたりした事もあつた。戦戦後間もない頃在ブラジル田代氏（高工電化卒）から見舞に砂糖を一袋送つていただいた事があつた。この当時は砂糖もしばらく見なかつたので一家大よろこびでそろつて白い結晶を眺めた。父は名刺を二つに折りそれで砂糖をすくい何か貴重な物でも取扱うようにした事を昨日のように覚えてゐる。食糧難と敗戦による気落ちも加わり、昭和二十年末から二十一年にかけて父は栄養失調となり元氣なく過したが、其の後間もなく元氣を取り、戻し、昭和二十四年の衆議員選挙に横浜高工機械第一回卒業の鳥谷氏が立候補するや、自らトラックに乗り、街頭演説をこころみたのであつた。

其の後健康を保ち晴耕雨読の生活を送り、夜も就寝の九時十時迄書物をはなさなかつた。戦争のインフレで新刊書は高く手にとかず、昔購入した支那の古典物を主として読んだ。父はかえつて此の機会に古典を落着いて勉強出来た事を喜んでゐる。

昭和二十七年秋には平和論者で有名な同志社大学学長田畑忍博士の招聘により京都同志社

大学で三無主義についての講演をした事があつた。この時は講演の前日汽車で横浜を発ち、講演後大阪での工業会で再び講演し、翌朝大阪を出で、夕刻帰浜しても少しも疲れをみせず、同行した私の方が疲れる位元氣であつた。

昭和二十八年暮に軽い脳溢血で床に着いたが之も一年位で回復、天氣の良い時には弘明寺の学校迄一人で散歩に出掛けたりした。家族の者は年寄の一人歩きを心配したが父は妙に頑固な所があり、これをうるさがつた。

昭和三十三年四月に健康を害して床に着くようになった。すでに八十八であり病因は高血圧と神経痛であつた。

現在では食事の時及び暖かい日に庭の散歩をする以外は床の中で過している。本は相変わらずはなさず最近では主に名士の書いた回顧録のような物を読み、特に伊藤正徳の著書を好んで読んだ。

三年前父は孫の桃代が生れた時クルミの種を庭に蒔いた。二本が芽を出し、一本は枯れてしまつたが一本を工学部正面の庭に植え残る一本は家の門を入つた左側に植えてある、このクルミが大木となり孫達がかかるみ拾いをする迄父に長生きしてもらいたいと念願してやまない